

脆弱性，ケアと道德教育

池谷 壽夫

了徳寺大学・教養部

要旨

本論文は、新たに（小学校では2018年度、中学校では2019年度から）スタートする「特別の教科 道德」で道德の授業をする際に、どのような人間観や視点をもつ必要があるのかを明らかにする。そのために、まず人間が抱える根源的な「脆弱性（vulnerability）」を原理的に考察し、そこから相互依存関係にある「関係的で脆弱な個人」概念を、新学習指導要領が前提としている人間観と対比するかたちで、導き出す。次に、人間の脆弱性から必然的に生じる「ケア（care）」がもつ道德的な含意を、ノディングス（Noddings, N.）によりながら明らかにする。最後に、以上の分析を踏まえて、道德教育を行う上で留意すべきポイントをいくつか提起する。

キーワード：脆弱性，ケア，道德教育

Vulnerability, care and moral education

Hisao Ikeya

Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University

Abstract

This paper purposes to clarify the key viewpoints we must have in teaching the new “special subject morals”, starting in 2018 at elementary schools. Firstly, we consider the “vulnerability” that human beings have in principle, to deduce the concept of “relational and vulnerable individual” from this consideration and also to compare it to the view of humans from the New COURSES OF STUDY. Secondly, we clarify the moral implications of care that arise from human vulnerability necessarily, referencing the work of Noddings. Finally, we suggest several viewpoints that we should pay attention to, when students learn “special subject morals”.

Keywords: vulnerability, care, moral education

はじめに

これまでのいわゆる「特設道德」にかわり、「特別の教科 道德」(以下「道德」)が、小学校では2018年度から、中学校では2019年度からスタートする。道德を教科とすることには、いくつかの疑念や懸念があるものの、教科として取り組む以上、教える側には、これまで以上にしっかりと自分なりの人間観が要請される。また、今日「道德」で授業を行う際どういう点に留意すべきなのかも問題となる。以上のことを明らかにするため、本論文ではまず、「道德」の基礎におかれている人間観の特徴を明らかにする。その上で、それとは異なる人間観を提示するために、人間が根源的に抱える「脆弱性＝傷つきやすさ（vulnerability）」を検討する。次いで、その人間の「脆弱性」から必然的に生じるケアの道德的意義を、ノディングス（Noddings, N.）の議論を中心に検討する。以上を検討した上で、最後に道德の授業を進める上での基本的な留意点を

提示する。

1. 「特別の教科 道徳」が求める人間像

政府・文部科学省の「道徳」のねらいは、大きくは2つあると思われる。

「自立」した強い個人と「主体性」

第1は、グローバル競争を勝ち抜く資本を支援・強化するこの間の新自由主義政策のもとでつくりだされた個人間の競争（成果主義・業績主義）の激化，長時間労働と労働の不安定化（非正規雇用）や社会保障費の削減を側面から補強し，それを正当化してくれる人間をつくりだすことである。それが，「自立」（あるいは「自律」）と「自己責任」にもとづく「強い個人」という人間観である。

「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」（道徳教育の充実に関する懇談会，2015年12月）で「自立した一人の人間」や「今後の時代を生き抜く力」，「実践的な行動力等の育成」など「自立」や行動力が強調され，「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（中央教育審議会，2016年10月）でも，「一人一人が，生きる上で出会う様々な場面において，主体的に判断し，道徳的行為を選択し，実践することができる」ようにさせることが道徳教育の目標とされている。

そして新学習指導要領や解説ではこの「自立」がキーワードとして新たに登場する。そこでは，「自己の生き方を考え，主体的な判断のもとに行動し，自立した人間」が「他者と共によりよく生きる」（第1章総則），そのための基盤として道徳性を養うことが目指されている。そのために，これまで以上に「強い意志」や「主体性」が強調されている。例えば，これまでの「より高い目標を目指し，希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ」という目標が，「より高い目標を設定し，その達成を目指し，希望と勇気を持ち，困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げる」（新学習指導要領）に変えられ，といったぐあいである。また，「解説」でも「主体的に判断する態度」や実践力がことさらに強調されている。

既成の社会と国家の安定化

第2の大きなねらいは，新自由主義政策の下でバラバラに社会に放り出された不安定な「むきだしの個人」をなんらかのかたちで安定化させ，社会とグローバル競争国家へと繋ぎ止めることである。そのために，まず父母，祖父母や教師を敬愛し，集団のなかで自分の役割と責任を果たすことが強調される。次に法や社会規範を主体的に進んで遵守すること（「遵法心，公德心」）がこれまでよりいっそう重視され，「規律ある安定した社会の実現に努める」ことが求められる。

その上さらに，「国」がこれまで以上に強調されている。これは，小学校学習指導要領にとくに顕著で，これまでの「郷土や我が国の伝統と文化」という文言が「我が国や郷土の伝統と文化」へと並び順を変え，国を先においている。また，国家（state）と国（country）は本来異なる意味を持つが，それを（意図的にか？）混同することで，「我が国への親しみや愛着」を国家への愛へと繋ぎ止めようとしている（中学校学習指導要領解説）。この点では，「道徳」は日経連が求めている「グローバル人材に求められる倫理観や公德心」（日経連「次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革」2014年4月）を体現したものと言っていいであろう。

ここにみられるように，「道徳」では，新学習指導要領で弱さや醜さを持ち他者と生きると言われているとしても，最終的には，①自己責任を負った自立した強い個人が目指され，②この個人が一人でさまざまな社会的状況に直面し，それに対峙していかにかこの困難を克服するかに焦点が当てられている。しかし

その一方で、③社会や国家に無批判的に主体的・自発的に従属することが求められている。

そしてまた、ここには、次のような個人が前提とされている。第1は、社会と切り離され、それに対峙し内省する心理主義的な個人である。それゆえ、個人の問題は社会的関係の問題として考察されずに、一方的に個人の側の責任と義務が問われることになる。第2に、「自分自身の弱さ」は克服の対象とされるので、「弱さを抱えた個人」は評価されず、排除されることになりかねない。この点でこの「弱さ」をどう見るのが、「自立」の内容とともに問われることになる。

2. 人間が抱える脆弱性と依存性

しかし、われわれ人間はむしろ、はじめから社会や関係のなかに埋め込まれた個人ではないのだろうか。また、われわれ人間はそんなに「強い」ものではないであろう。そのことを問い直すために、ここでは、「脆弱性」概念を切り口にして、人間観をとらえ直してみる（池谷2016a, 2016c）

エコロジー的脆弱性

筆者の見解では、人間は「脆弱性」を根源的に抱えている。1つめは、人類が主として自然的=身体的存在として抱える脆弱性である。これは、人間がその身体的組織そのものによって自然に依存せざるをえず、それによってつねに根源的に制約されているという意味で、「エコロジー的脆弱性」と呼ぶことができる。まず、マルクスの言うように、自然存在として自然的なニーズを持つ人間は、その対象となる自然に依存せざるを得ないという点で、「受苦的な、条件づけられた、制限された存在」（マルクス1962: 222）である。かかる存在として、人間は自分の外にある自然に対してつねに脆弱である。

人間はまた「人間的な自然存在」として、基本的には他の動物と同様に自分の外にある非有機的な自然（1次的な自然）に依存し続けながらも、それを労働によって加工することで、人間にとって必要不可欠な「非有機的身体」（2次的な社会的自然や文化）を周りに作りあげる。しかしこの「非有機的身体」ですら、脆弱である。第1に、科学技術の水準に応じて、生産力の達成や利潤のために、自然に還元することもできないもの（プラスチック）や、人為的にコントロールできないもの（例えば、核燃料）がつくりだされる危険性がつきまとう。第2に、人類は、文化を新しい世代につがなく伝達し継承させていくこと（社会的遺贈）でしか、生き延びることができない。しかし、世代交代はつねに生命の存続の「危機」をはらむ。新しい世代が生まれてくるたびに、古い世代は、2つの大きな課題に直面せざるをえないからである。一方では、新しい世代の生命とその成長を保障するために、既成の世界から「破壊的なことが何一つふりかからないように特別の保護と気遣い」を新しい世代にしてやらなければならない。しかしそれと同時に他方では、古い世代は、世代交代のたびに世界を襲う新しい者の出現によって、既存の文化が荒廃させられたり破壊されたりしないようにしながら、新しい者にその文化を伝えていかねばならない（アーレント1994: 250）。この2つの意味で、人間は外部につくりだした「非有機的身体」に対して脆弱であると言わざるを得ない。

それだけではない。人間は地球上で起こる様々な自然災害（地震とそれによる津波、火山の爆発、ハリケーンなど）とそのリスクを減らすことはできても、完全になくすことはできない。自然現象の法則性を解明し、その発生を予測し、災害に備えたとしても、それらの自然現象を完全にはコントロールすることはできない。以上の意味では、人間は自然に対しては根本的に脆弱なのである。

生得的＝身体的脆弱性

2つめに、人間が個体発生的な発達上で抱える「生得的＝身体的脆弱性」がある。第1に、人間は受精させられ、有機的身体をもった人間として孕まれ産ませられる（be born）ように、その生の始点においてすでに根源的な受動性を抱え込む。しかも、この生は、その出産前にあっては生きさせられるか殺されるか、生きるに値するか否か、また出産後にあっても歓迎されるか否かも、周りの大人と彼らが生きている社会的条件に決定的に依存している。障害を持って生まれた場合には、生への脆弱性がいっそう強まる。第2に、人間は、有機的・生物的身体を自らの生の基体としている点でも、受精から死に至るまで脆弱性を抱える。人間は、発育し成長し、時には病気にかかったりかかりやすくなり、高齢になれば何らかの病気を持病として抱える寛解者となり、苦痛や苦悩を抱えつつ、しだいに機能や能力が喪失したり消失して衰え、そして最終的には死んでいくといった、生物学的に規定された身体とその成熟プロセスに従って生きていく。

もっとも、こうした成熟プロセスとライフサイクルに伴って生じるさまざまな脆弱性は社会に生きる身体的個人が被る脆弱性であるから、生物学的・社会的なものである。例えば、健康と病気も資本主義下における社会的不平等によって大きな差異を生じる。第3に、人間は「生理的早産」（A・ポルトマン）の所産として、出産前に大人によってケアされるだけでなく、出産後にも大人から授乳とケアを受け、養育・教育されなければ、人間として生き延びることができない。みな、大人に依存しており、大人からのケアを必要として生きてきた。そして、この社会化のプロセスを経ながら、人間は社会的な身体的存在として身体化され（embodiment）、社会的に構築されていく。別言すれば、身体はますます社会関係に組み込まれることで、「社会的関係の凝集体」となっていく。

構造的脆弱性

こうした依存性とケアのゆえに、子どもはつねにさらなる「社会的脆弱性」に晒される。まず、子どもはそうした依存のゆえに、大人という他者によって、つねに恣意的に濫用＝虐待（abuse）される「危うさ」をもつ。第2に、その依存関係のゆえに、子どもは、大人との間で「共依存」という権力的関係に組み込まれうる。第3に、子どもは、既成のジェンダー規範や能力主義、障害者差別あるいは人種主義に晒される。例えば、能力主義にもとづいて、「できる子」の生が優遇され、「できないとされた子」、とりわけ障害者の生の処遇が不平等に扱われる。障害者は生得的にも脆弱であるだけでなく、社会的にもいっそう脆弱とならざるをえない（脆弱性の不平等な社会的配分）。

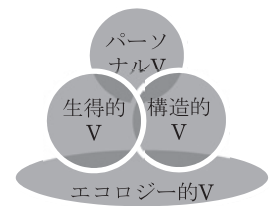
もちろん、こうした脆弱性には、資本－賃労働関係における労働者も晒されやすい。だが、この脆弱性は、資本主義下における差別的な社会構造とそこでの規範にもとづいた「構造的暴力」の下で人為的に作りだされた「社会的弱者」（非正規労働者、子ども、女性、障害者、ホームレス、人種的マイノリティ、先住民など）にとくに強く作りだされるから、これは「構造的脆弱性」である。これが、人間が抱える第3の脆弱性である。

パーソナルな脆弱性

以上の3つの脆弱性は、身体的存在としての個人によって、その身体そのものにおいてそれを介して凝集され、主観的な脆弱性として個人的に体験される。例えば、「苦しみ」はそれ自体としてのみあるわけではなくて、個人にとっては主観的に「苦痛」や「苦悩」として体験される。しかも、その脆弱性の質と幅は、その人間が家族的関係や社会的関係のなかで、生育過程をとおして獲得してきた性格や気質、規範、

およびさまざまな社会的・医学的サポートのあり方などによって、さまざまでありうる。

こうした、個人のうちに凝集される脆弱性が、第4の「パーソナルな脆弱性」である。しかも、大人でも子どもであればなおさら、同僚や友だちの間で社会的な承認を受けることができなければ、それによって無力感を抱え込んだり、自尊心を失い、時には精神的な病理すら抱えてしまう。「パーソナルな脆弱性」が否定的な形で形成される場合の脆弱性を「病理的な脆弱性」と呼んでおく。



以上の4つの脆弱性（V）の構造を図示すれば、右図のようになろう。ただし、とりわけ第1と第2の脆弱性は人間にとって不可避であるとしても、それ自体としては、必ずしも「傷つきやすい」とか「脆い」とか「弱い」といった表現で否定的にとらえてはならない。むしろ重要なのは、これらの脆弱性を人間が抱えたり抱えやすいからこそ、相互依存関係のもとで相互にケアし合う関係が人間にとって本質的だということ、まただからこそ、脆弱性が構造的な脆弱性や病理的な脆弱性に陥らせない平等な社会や社会福祉制度が必要だということである。

こうしてみると、第1と第2の脆弱性は「人間の条件の普遍的な、不可避な、永続的な局面」(Fineman 2008: 8)であると言わざるを得ない。しかもこの脆弱性のゆえに、自然の豊かさと脅威という状況の下で、人間はみな子どものときには誰かに依存し、年をとり、病いを得たり、障害を持てばそれ以上に、ある個人やグループや社会制度に依存せざるを得ない。この意味で「依存は個人のライフヒストリーにおいて避けることができない」(Kittay 1999=2010: 29/81)。依存もまた脆弱性とともな、人間の例外状態ではなく、人間の条件であると言える。また、だからこそ、「依存者の脆弱性から、そのために誰かが不可避免的に他者のニーズに応じなければならない一連の状況がつくりだされる」(ibid.: 30/82-83)。こうして人間はたえず他者からのケアを必要とせざるを得ないし、依存した人間を前にすれば、ケアすることを余儀なくされ、応答せざるを得なくなる。したがってケアもまた、人間の生が抱え込んでいる脆弱性と依存性から不可避免的に生じてくる実践的活動であり、人間の生につねに随伴する必要不可欠な活動である。

以上の検討に立って、「人間の脆弱性」を、以下のように概念的に定義しておきたい。「人間の脆弱性とは、人間にダメージや喪失あるいは危害を及ぼしそれを受け入れやすくさせる自然的・身体的・構造的・個人的要因の総体である」¹⁾。

3. ケアの道徳的意義——ノディングスのケアリング論を中心に

このケアの倫理を最初に提起したのが、ギリガン (Gilligan 1982=1986) であるが、これを教育哲学の立場からさらにケアリング (caring) 論として独自に展開したのが、ノディングスである。ノディングスの基本的立場は、「人間のケアリングと、ケアしたりされたりした記憶」こそが「倫理的応答の基礎」(Noddings 1984=1997: 1) をなすというものである。

ケアリングとは

ではケアリングとはどのような特徴と構造を持つのだろうか。ノディングス (Noddings 1984=1997) は「ケア」を次の3つの位相に分けている。1つは、「重荷 (burdens)」と同一視される「気掛かり」という意味でのケアである。「もし私に重荷や心配事があれば、私が現在や計画された事態に思い悩むならば、私はある事柄 (職業的、個人的ないしは公的な事柄) にケアを持つ (気掛かりである have care in)」²⁾。2つ目は、「気

に掛けている」という位相である。「もうひとつの意味では、私は誰かにちょっと欲望 (desire) や好意 (inclination) を感じるならば、その人にケアしている (気に掛けている)。これに関係した意味では、私がだれかの見解と関心事に敬意・好意 (regard) をもつならば、その人にケアしている」。第3の位相は、「世話する」という位相である。「私がもし年老いた親戚の人の身体的福祉に対して責任を託されているならば、私はその人をケア (世話) している」(ibid.: 14)。つまり、ケアには①「気掛かり」、②「気に掛ける」、③「世話」という3つの位相を持っており、①と②はどちらかといえば情動的なものであり、③がケアという実践になる。もちろん、この三者は必ずしも切り離されてあるわけではない。

その上で、ノディングスは「ケアリング」を、ケアする者の意識という面から、①専心没頭 (engrossment)、②動機づけの転移 (motivational shift) の2つによって特徴づけている。①は受容である。それは「ケアされる者へのオープンで、えり好みしない受容性」(Noddings 1992=2007: 43) であり、「私は他者を自分自身へと受容し、他者とともに見たり感じたりする」(Noddings 1984=1997: 46) のである。②については、ノディングスは次の例を挙げて説明している。靴紐を結ぼうとしている小さな子どもを見守っている時に、自分自身の指が、共感的に反応して動くことがよくあるが、これこそが動機づけの転移である。それは、「われわれの動機づけのエネルギーが他者と他者の課題 (projects) に向かって流れ出すこと」(Noddings 1992=2007: 44) なのである。

こうした「専心没頭」や「動機の転移」があつてこそ、ケアの実践がケアされる者の感情 (泣く、叫ぶなど) や呼び掛け (無言の身体的呼び掛けや声による呼び掛けなど) に対する応答として起こり、その応答に対して何らかのかたちでケアされる者が再び応答する (満足の笑みや「ありがとう」といった言葉や態度) といった関係が成り立ってくる。ケアはつねにこうした《ケアする－ケアされる》という相互依存関係のプロセスの中にある²⁾。

ノディングスはケアリングをこうした相互依存関係の中にみるので、「気に掛けること (caring about)」という間接的な関係よりも、「ケアすること (caring for)」という直接的・対面的関係のほうを、道徳的生活における基本として優先している。しかし、前者もケアリングの確立と維持に貢献するものとして、重要な意義が与えられている。こうして両者の関係は次のようにとらえられる。

気に掛けること (あるいは、おそらく正義感) は、ケアすることが盛んになりうる条件を確立する上での道具だとみなされねばならない。好まれるケアリングの形態はケアすることだけでも、気に掛けることは前者を確立し、維持し高めるうえで助けになりうる。(Noddings 2002: 23-24)

自然なケアリングにもとづく倫理的ケアリング

ノディングスは、ケアリングの倫理を論じる際に、ケアリング関係における「自然なケアリング (natural caring)」を重視している。それは、後者こそが前者の人間的な基礎＝「人間の条件」だと考えているからである。自然なケアリングについて、ノディングスはこう述べている。幼少のころに「ケアしてもらったというかすかな記憶 (inkling)」、これこそ、「われわれの相互への応答の根源」であり、「ケアにこれが根づいているから、多くの共通した人間的状況において、われわれは自発的に他人の窮状に応答するのである。私はこの自発的応答を「自然な」ケアリングと呼んできた」(Noddings 1995=2006: 311-312)。

この自然なケアリングは、ケアされたというかすかな記憶にもとづくから、「われわれが愛からあるいは自然な性向 (inclination) からケアする者として応答する関係」(Noddings 1984=1997: 7) とも呼ばれる。

したがって、「ケアへの動機はおのずから生じるものであり、他から命ぜられる必要のないものである」(Noddings 1995=2006: 312)。ここで「自然な」という形容詞は本質主義的なものを指しているのではない。それは「好みが強制されていないこと」、「始めるのになんら努力を必要としないということ」(ibid.: 333)だけを意味している。

ノディングスによれば、道徳性には2つの感情(feeling)が必要である。その1つが、この「自然なケアリングの心情(sentiment)」であり、「第2の心情はこの第1の心情を思い起こすことへの応答の中で生じる」(Noddings 1992=2007: 124)ものである。また、この第1の心情は「しなければならない(I must)」という感情だが、この感情には、「したい(I want)」が伴っている。「自分の赤ん坊が夜泣きしているとき、私は何かをしなければならないと感じるだけではなく、その子の苦痛を取り除きたいのである」。これに対して、第1の心情にもとづく第2の心情は「すべきである(I ought)」(ibid.: 129)という性格を持ち、これこそが真の道徳的心情である。

こうして、倫理的ケアリングは、一方では自然なケアリングとその心情に依存しながら(それを基礎にしながら)、他方では「この最初の心情を受け容れ維持する最善の自己」(ibid.: 126)に対して感じそして共感する心情にもとづくこととされる。ノディングスは、倫理的ケアリングを「自然なケアリングをうちたてたり修復したりする際の道具」(Noddings 2002: 30)とすら言っている³⁾。自然なケアリングをうちたて修復し保存していくこと、これが倫理的ケアリングの役割なのである。

原則の倫理と普遍化可能性の拒否

倫理的ケアリングは自然なケアリングにもとづくとするので、ケアリング志向を道徳性の第3段階のよい子志向としてより低次のものとしてとらえるコールバーグ((Kohlberg 1981)の理論は当然のことながら、ノディングスによって批判される。「女性はコールバーグによって、第3段階、すなわち道徳的主体が「よい子」でありたいと思う段階で「行き詰った(being stuck)」ものとして理解される。だが、よくありたいという願望、今ここでケアされる人々に応答してケアする者でありたいという願望は、倫理的行動に対して、健全でうるわしいもう一つの基礎を与える」(Noddings 1984=1997: 67, なお150も参照)。この点でノディングスはギリガンのケアの倫理を評価する(ibid.: 150)。

もっとも、ノディングスは、コールバーグの発達段階論もギリガンのそれも否定する。道徳性を発達段階論的にとらえようとする営みそのものに疑義をもつからである。「私たちを含む他の者は発達モデルという全体的な考えに異議を唱え、ある個人における道徳的応答は、ほぼどんな年齢でも文脈によってさまざまであることを主張した」(Noddings 1992=2007: 54)。つまり、ケアリングにおいては、発達段階という一般的なものは想定することができず、文脈によってさまざまだというのである。

もう1つの批判は、コールバーグも依拠しているカント主義の「原則の倫理(an ethic of principle)」とその原則の「普遍化可能性」(普遍的な倫理原則)に対してなされる。ノディングスによれば、倫理的ケアリングは、カント主義のように、「Xという条件のもとであなたがAという行いを求められるならば、十分によく似た条件下では、私もまたAという行為を求められる」といったものではない。それは、自然なケアリングにもとづく倫理的ケアリングでは、「どのようにしてわれわれが他者に道徳的に出会うのか」ということに目が向けられており、またそこでの「人間の出会いの独自性」が重要だからである(Noddings 1984=1997: 8)。とはいえ、倫理的ケアリングにも「基本的な普遍性」といったものはある。それは「ケアする態度、すなわち、ケアされたことのわれわれの最初の思い出と、ケアしケアされること双方のわれわ

れの思い出の蓄積の増大とを表現している態度」であり、これは普遍的にアクセスできるものなのである (ibid.).

この倫理的なケアリングを、ノディングスは当初は何世紀にもわたる女性の経験にもとづくものとして、「女性的な見解 (a feminine view)」(1984=1997: 2) だとみなしていた。しかし、その後この経験は女性に限定されるものではないとして、誤解を招きやすい《feminine》という言葉を使わないようにしている。

これまで私は「女性的 (feminine)」という言葉を使ってきた（これから先は二度と使わないことにする）が、そのとき私が意図していたのは、何世紀にもわたる女性の経験と、それらと長らく関連づけられてきた仕事と価値を指すことであった。（……）ケアの倫理学は女性の経験の一つの重要な側面を切り取っている、という意味で、「女性的」なのであるが、その経験とそこから生まれる道徳的な思考が、女性だけに限定されているというわけではない。（Noddings 1995=2006: 317）

ケアリングにもとづく道德教育

ノディングスは、以上の倫理的ケアリングの立場から、学校の任務を次のようにとらえる。学校の第1の仕事は「子どもたちをケアすること」であり、「有能で、ケアをし、愛情に満ち、愛される、そうした人に成長するよう促すこと」(Noddings 1992=2005: 17-18) である。そしてまた、道德教育の目標も、何よりも「自分自身と、自分がコンタクトする人々のうちにあるケアリングを保存し高めること」(Noddings 1984=1997: 265) にある。

この道德教育は、①モデリング、②対話、③実践・実習、④確証 (confirmation) という4つの構成要素からなる。①のモデリングとは、ケアリング関係の中で、生徒にケアする者として自分自身を示すことであり、生徒側からすれば、「ケアされることを学ぶこと」である。これが「道德教育の第1ステップ」(Noddings 2002: 24) と言われる。

②の対話とは、「互いに話し合い、聞き合い、分かち合い応答し合うこと」であり、その中で、「諸観念と触れ合い、他者を理解し、他者に会いケアすることである」(Noddings 1984=1997: 287)。

③は、病院、養護施設、動物シェルター、公園や植物園で現実の労働に参加することである。ここでの重点は、職業目的のためのスキルを身につけることではなくて、そこで獲得された「発達したスキルがどのようにケアリングにおけるコンピテンスに貢献するか」(ibid.: 289) ということに置かれている。

④の確証では、ノディングスは、M・ブーバー (Buber 1965) の「他者のうちにある最善のものを肯定し励ます行為」を意味する「確証」概念を受け継いでいる。すなわち、確証とは、誰かのうちにある「より善い自己を見つけ、その発達を励ます」(Noddings 1992=2007: 60) ことであり、生徒と対話し、生徒と協同的な実習に参加することで得られるものである。

ケアリングにもとづく学校カリキュラム構想

さらに、ノディングスは、これまでのリベラル教育(教養教育)にかえて、ケアリングにもとづいたカリキュラム構想を提起している (Noddings 1992=2005: 93-124)。それは大きくは、①自己のケア、②親密な他者に対するケア、③人間以外の生命との関わり、の3つからなる。

①では、とくに身体的な自己のケアと職業的関心が挙げられている。前者は、教育において優先されるべきものであり、栄養、衛生、身体的訓練、外見、ヘルスケアのすべてに対して注意することである。②

では対話が重視されており、この対話において学ぶべきことの一部として、「コミュニケーションし、意思決定を共有し、妥協に達し、日常の問題解決にあたって相互に支え合う能力」が挙げられている。③では、動植物の生命に対するケアや尊重、物と道具に対するケア、理念に対するケアなどが挙げられている。

4. 〈母 - 子〉関係と「ホーム」

ところで、ギリガンによるケアの倫理の提起以降、「ケアの倫理」を主張する論者には、そこに通底した共通の理論的構成や理念が見られる。それは、①人間の脆弱性と依存にもとづいた、相互依存的な人間・人格観、②理論の出発点としての「母 - 子関係」モデル、および③そこに育まれる「ホーム」である。①については、すでに見たので、ここでは②と③を取り上げる。

相互依存関係とケアの原型は、何らかのかたちでの理念的な〈母 - 子〉関係に求められる。ノディングスのケアリングの基盤にあるものも、〈母 - 子〉関係における〈ケアする - ケアされる〉相互関係であった。もっとも、この〈母 - 子〉関係は、必ずしも現実の母親と子どもの関係を指すわけではない。ファインマンの言うように、それはメタファーであって、「「母子」対に体现されるケアの担い手と依存者とからなる養育家族単位 (nurturing family unit)」(Fineman 1995=2003: 249) を指し示すものである。

キティもまた、依存関係の入れ子構造を表現するものとして、「私たちはみんな——等しく——お母さんの子どもでもある」(Kittay 1999=2010: 74) ことを確認している。保護される者もケアする依存労働者もまた「誰かお母さんの子ども」として、両者ともども個人的にも社会的にもケアされなければならないのである。

ノディングスは、ラディック (Ruddick 1989) の「母親の思考」の視点から、こうした〈母 - 子〉関係のなかでケアが育まれる場を「ホーム」と呼んでいる。ノディングスによれば、「依存とホーム」こそが、「あらゆる人間の原初的な条件」(Noddings 2002, pp. 121) なのである。もちろん、「ホーム」は核家族のみを意味するものではなく、そこでは多様な家族のかたちが想定されている。ここでのノディングスの関心は、「ホームで子どもたちが不可避免的に何に出会っているのか、そしてどんな種類の経験が発達しつつある関係的自己を形成するのかを問う」(ibid.: 122) ことにある。前者の出会いについて、ノディングスは、子どもが出会うものとして、自他の身体、物、場所、思いやりのある愛情、成長、受容されうること (acceptability) などを挙げている。

マーティン (Martin 1992=2007) もまた「ホーム」の今日的重要性を認識して、モンテッソーリの「子どもの家」での教育哲学と実践を自分自身の思考実験に組み入れ、新たな学校を「スクールホーム (Schoolhome)」として構想している。マーティンの関心は、父母の両方が家庭を離れて仕事に行こうとしている今、「どのようにすればわれわれは、すべての子どもがアットホームだと感じるホームの道徳的等価物を創り出すことができるのか」(ibid.: 59) ということにある。そこでは、「家庭的であること (domesticity)」を学ぶことと、「子どもの家」でもみられ、とくに女性に割り当てられてきたもの、すなわち、「ケア (care)」, 「関心 (concern)」および「結びつき (connection)」の3Cを実践し学ぶことが重要視されている。

前者の「家庭的であること」を学ぶとは、「ホームのような環境の中で一緒に生活し働くこと」を学ぶことである。「スクールホームは、その生徒に、拡大家族に食事を与える責任を与えて、それぞれの生徒が公平に分担するように課題を順番ですること、家庭的なことは誰もの仕事であることを事例によって教える」(ibid.: 187) のである。後者の3Cでは、大人に礼儀正しく接する、客をもてなす、親友の喜びや悲

しみを思いやる、彼らとの一体感を持つ、彼らのニーズに直接応えるなどのことが考えられている (ibid.: 40). そしてさらに、スクールホームでは、この3Cの学習を通じて、女子、とりわけに男子には、「ジェンダーに敏感であること」(ibid.: 139) を学ぶことが重視されている。

5. 関係的个人と関係的能力

先に見たように、人間は、必然的に抱える脆弱性とそこから派生する依存性、およびそこに必然的に要請されるケアによって、〈ケアする－ケアされる〉という相互依存関係のなかにすでに放り込まれて生きている。そうであるならば、人間は、自由主義、ましてや新自由主義が想定する「自己責任を負う自律した個人」や「強い個人」ではありえない。むしろ、個人は、本質的には、脆弱性を抱えるがゆえに、歴史的にも個人史的にも、つねに他者との関係の中で相互に依存しつつ支えあう個人である。こうして、個人は社会的に相互に依存し合う「関係的で脆弱な個人」としてあり続ける。

とすれば、「自律 (autonomy)」もまた、これまでの人格論や生命倫理で往々にして主張される、個人主義的な「自律」ではない。それは、こうした脆弱性と関係性のなかで育まれ支えられながら形成される自律、「関係的自律」としてある (池谷2016b)。すなわち、「自律」は他者との関係のなかで、他者に依存し他者のサポートをうけつつ、形成されていくプロセスにあるものとして、とらえ返されるのである。

ただし、その際、以下のことが強調されねばならない。まず、自律の核となる自己決定 (能力) や選択 (能力) は個人的に形成され、個人が所有する能力とは必ずしも言えない。むしろ、それは他者との (相互) 依存関係においてケアしケアされるなかで「社会的に構成された能力」 (Mackenzie et al. 2014) なのであり、また日常的にも他者や社会のさまざまな介助・サポートによって相互に「補完された能力」として存在する⁴⁾。

しかも、それは一時的に個人の能力として所有され担保されるものであっても、つねに関係性のなかにある。選択し自己決定する能力は最終的には個人が担保し行使しなければならないとしても、その発達にも行使にもつねに他者と社会のサポートがなされている。また、そうしたサポートが相互になされるためにも、「自律」能力のうちには、関係によって支えられる能力だけではなく、さらに相互関係のなかで「新たな関係を再形成し育む能力」 (Held 2006: 13-14) も含まれることになろう。最後に、そうしたサポートや介助がなされうるためにも、また脆弱性や依存が病理的脆弱性に陥らずに自尊心を育むものであるためにも、個人の脆弱性と自律が社会的に承認され、保障されなければならない (Anderson/Honneth 2005)。

おわりに一道德教育に求められるもの

以上の人間の脆弱性とケアの倫理の検討から、道德教育に対してどのようなことが示唆されるであろうか。それを提示することでまとめに代えることにしたい。

まず第1に、道德教育をする際にも、「脆弱性を抱えた弱い個人」を出発点に据えなければならない。私たち人間は脆弱であるがゆえに、他者に嫉妬したり、悪に誘惑されたりする時もあるれば、逆に善いこともしたりする時もある。そしてまた、だからこそ私たちは支えあったり、協働しあったりする必要があるし、そのことを介して、より人間的なものや善いものを求めていくのである。

第2に示唆されることは、道德教育は徳目主義であってはならないことは言うまでもないが、また徳の教育に終始してもならないことである。さらに、それは、今日「ゼロトレランス」の生徒指導で強調される「規範教育」にも陥ってはならない (松下良平 2014)。これらの教育では、道德は原則や普遍性を持つ

にしても、それは他者不在の空虚な道德となり、また他者のニーズや声に耳を傾けたり、応答することをしない道德に陥るからである。

第3に、道德教育では、コールバーグのように道德的ジレンマを提示して子どもたちに「どうすべきか」という道德的判断を迫るだけでは十分ではない。むしろ、対面的な関係のなかで、どのようにしたら相互を損なわない最善のあり方がありえるのかを考えさせることを起点とすべきであろう。

また、ノディングスが言うように、そうしたケアされたりケアする経験から、「気掛かり」へとケアの世界を公的世界へつなげ広げていくことも必要であろう。それは、言い換えれば、ケアにもとづく道德教育をシティズンシップ教育へとつなげていくことであると言ってもよいかもしれない。ここで言うシティズンシップ教育とは、お互いに市民として双方のニーズに耳を傾けながら応答し合い、お互いが納得し合えるような関係のあり方を、社会的なレベルで探り合いながら連帯し協働する、そうした能力や態度を育成する教育である。こうした能力は、ヘルドの言う「新たな関係を再形成し育む能力」と言ってもいいかもしれない。

第4に、そのためにも、「ケアされた体験」を思い起こしたり、「ケアされることを学ぶこと」あるいは「大切にされることを学ぶこと」も、道德教育の1つの重要な基礎に据えられねばならないであろう。

第5に、ノディングスが挙げた道德教育の構成要素が考慮される必要があるだろう。とりわけ、相互の尊重にもとづいた対話が、道德教育の核に据えられなければならないだろう。

最後に、こうした道德教育を実践するためには、何よりも学校が「ホーム」として子どもの安心と安全な場となっていなければならないことは、言うまでもない。しかし、それと同時に、コールバーグも指摘していたように、教師も含めて学校と学級がそれぞれの個人を尊重しあう民主的で公正な学校（just school）となっていなければならない。すなわち、学校はケアと正義（justice）が統合された場でなければならない。ヘルドの例にならって言えば（Held 2006: 41）、学校における教師の教育は、ケアをとおして子どもの身体的・精神的ニーズを満たすことを含めて、子どもの安全・安心を保障すること、および子どもの適切な発達を優先しなければならないと同時に、子どもをつねに差別なく公平にかつ尊敬をもって遇さねばならないのである。

*文献からの引用は原則的に、池谷（2000: 19）というように、著者名、刊行年、ページ数の順に（ ）内に記す。また邦訳のあるものは邦訳ページを記すが、訳は必要に応じて変えてある。

註

- 1) なお、Rogers et al. (2012: 22) はGoodin (1985) の脆弱論やニーズ理論を踏まえて、「脆弱性」を次のように定義している。「脆弱であるとは、ある人の生命にかかわる（vital）ニーズの充足に関して重大な害（身体的、心理学的小および情動的な害）——ある人が元気な生活（a flourishing life）を送ることができることを損なう害——に対して影響を受けやすいことである」。
- 2) ノディングス（Noddings 2002: 19）は、こうした相互依存関係（ケアリング関係）を以下のようなかたちで示している。

「i. AがBをケアする——すなわち、Aの意識は注意と動機の転移とによって特徴づけられている、そして

ii. Aがi) に一致して何かの行動をなし、そして

- iii. Bが、AがBをケアすることを承認する」。
- 3) Noddings (1995=2006) ではこうも言われている。「倫理的ケアの偉大な貢献は、行為を導いていって、ゆくゆくは自然なケアが復活して、人びとがもう一度相互の自発的な配慮regardによって相互交渉していくようにさせることである」(1995=2006: 312)。
- 4) 関係としての能力、能力の共同性については、竹内章郎の一連の著作、とくに竹内 (2005) 参照。

引用・参考文献

- アーレント, ハンナ, 1994, 引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間』みすず書房。
- Buber, Martin, 1965, "Education," Martin Buber, *Between Man and Man*, Macmillan, New York, pp. 98-122.
- Fineman, Martha Albertson, 1995, *The Neutered Mother, The Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*, Taylor & Francis Books. (=2003, 上野千鶴子監訳『家族、積みすぎた方舟 ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房)。
- , 2008, The vulnerable Subject: Anchoring Equality in the Human Condition, *Yale Journal of Law and Feminism*, Vol. 20, No. 1, pp. 1-23.
- Gilligan, Carol, 1982, *In a Different Voice. Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press. (=1986, 岩男寿美子監訳『もうひとつの声 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店)。
- Goodin, Robert E., 1985, *Protecting the Vulnerable. A Reanalysis of Our Social Responsibilities*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Held, Virginia, 2006, *The Ethics of Care. Personal, Political, and Global*, Oxford University Press.
- 池谷壽夫, 2016a, 「脆弱性 (Vulnerability)」とは何か『哲学と現代』(名古屋哲学研究会)第30号, pp. 59-77.
- , 2016b, 「生命倫理と脆弱性」『了徳寺大学研究紀要』第10号, pp. 105-128.
- , 2016c, 「脆弱性」からセクシュアリティと道德教育を考える『季刊 セクシュアリティ』(エイデル研究所)第77号, pp. 62-70.
- Kittay, Eva Feder, 1999, *Love's Labour: Essay on Women, Equality, and Dependency*, Routledge. (=2010, 岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社)。
- Kohlberg, Lawrence, 1981, *Essays on Moral Development. Vol. 1; The Philosophy of Moral Development*, Harper & Row, San Francisco.
- Mackenzie, Catriona, Rogers, Wendy and Dodds, Susan ed., 2014, *Vulnerability. New Essays in Ethics and Feminist Philosophy*, Oxford University Press.
- Martin, Jane Roland, 1992, *The Schoolhome. Rethinking Schools for Changing Families*, Harvard University Press. (=2007, 生田久美子監訳『スクールホーム 〈ケア〉する学校』東京大学出版会)。
- マルクス, カール, 1962, 藤野渉訳『経済学・哲学手稿』大月書店。
- 松下良平, 2014, 「これからの道德教育を構想する」松下良平編著『新・教職課程シリーズ 道德教育論』一藝社, pp. 205-218.
- Noddings, Nel, 1984, *Caring. A Feminine Approach To Ethics & Moral Education*, 2nd ed., with a new preface, University of California Press. (=1997, 立山善康他訳『ケアリング 倫理と道德の教育——女

性の観点から』晃洋書房).

———, 1992, *The Challenge to Care in Schools. An Alternative Approach to Education*, 2nd ed. New York and London: Teachers College Columbia University. (=2007, 佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』ゆるみ出版).

———, 1995, *Philosophy of Education*. Westview Press. (=2006, 宮寺晃夫訳『教育の哲学 ソクラテスから〈ケアリング〉まで』世界思想社).

———, 2002, *Starting at Home. Caring and Social Policy*. University of California Press.

Rogers, Wendy, Mackenzie, Catriona, and Dodds, Susan, 2012, “Why Bioethics needs a Concept of Vulnerability”, *The International Journal of Feminist Approach to Bioethics*, Vol. 5, No. 2, pp. 12-38.

Ruddick, Sara, 1980, *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace*. Beacon Press, Boston.

竹内章郎, 2005, 『いのちの平等論 現代の優生思想に抗して』岩波書店.

(日本教育社会学会の投稿規定の書式に従い, 引用・参考文献を記載した.)

(平成28年11月25日稿)

査読終了日 平成28年12月5日